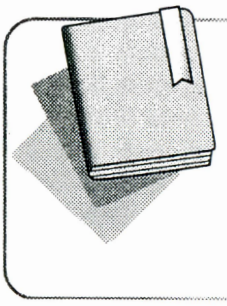


青春の一冊

本コラムに寄稿を依頼され、「青春」とは何なのだろうと改めて考えてみた。手元の国語辞典によれば「夢・野心に満ち、疲れを知らぬ若い時代」とある。確かにそういう側面もある。しかし、これは外面的な定義である。一方で内面的には「未来への不安に満ち、自らが何者かを模索して、内なる疾風怒涛の中で疲れ果てている若い時代」ともいえる。私の青春時代は昭和30年代後半から40年代前半で、日本の経済規模がどんどん大きくなり、社会の変化が極めて著しい時期にあたっていた。機械論的、常識論的な文化が一世を風靡（ふうび）し始めていたように思う。青春の心は内なるものと外なるものの乖離を鋭敏に嗅ぎ取り、多くの同世代人が集団をなして外なるものに戦いを挑んでいった。いわゆる大学紛争の嵐が吹き荒れた時代であった。しかし、私自身はこうした激しい動きにはどうにも馴染めないものがあった。クラスごとに行われていた討論会などに出かけて、日々を送っていたように記憶している。大学が封鎖されてからは、気の合う友人と渋谷の名画座や喫茶店などで時間を過ごすことも多かった。自らの内なるものにもっと関心があったのだ。

内省呼び覚ました批評眼

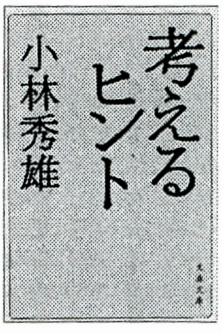
小林秀雄『考えるヒント』

山形俊男教授（理学系研究科）

このような時期に出会った本のなかで、その後の考え方に深く影響しているのではないかと思うのは小林秀雄の『考えるヒント』である。ここで著者は、自ら考え、内なるものを大切にする、生き生きした「変わり者」を愛し、思いあがった教養意識や客観性の名のもとに力をふるう常識の限界を指摘する。独創を言いながら、風潮の模倣ばかりをしている輩も痛烈に批判する。考える手間を省き能率的であろうとする時代の風潮に、古今東西の文献への深い洞察に基づいて警鐘をならしたエッセー集である。随所にぎくりとする表現があり、読み間違えたのではないかと思ったものだ。それゆえに記憶が鮮明なのだろう。たとえば、福沢諭吉の「私立」の意味を説いた後で、「民主主義」は「私立」の心を腐らせると断言する。明治政府が維新の気概を失って官僚化し、これを批判する自由民権運動さえも時流化してゆく中で、福沢諭吉の唱える「私立」とは、変化を体制的、表面的に受け入れる愚かさではなく、個が自ら考え、対処する強さを意味していた。強い個にとって、旧文明の経験を持って、新文明を照らす機会を持つことは、むしろ僥倖（ぎょうこう）であるとする。福沢諭吉のこうした私立主義に小林秀雄の個人主義が共鳴したようだ。充分に理解できたのかどうかはわからないが、『考えるヒント』は大学紛争時代の私にとてもしっくりきた。

こうして刺激された内なるものへの自覚が、極めて自然な形で私を研究者の道に誘ったような気がする。幸いなことに20代後半に九州大学に職を得て、30代に米国の研究所で研究する機会を得た後、40代に母校の出身研究室に戻ってきた。しかし、研究者の道は決して平坦ではなかった。現象の発見やその仕組みの解明の喜びの後で、無理解による批判、それとの論争、剽窃者との闘い等を生き抜き、そして超越しなければならなかった。すべて内なるもののなせる業である。同時に強い内なるものが無ければとても生き抜いてはこられなかっただろう。しかし、還暦をとうに過ぎた今、もっとも心落ち着くのは、同じ青春時代に何もわからずに読み飛ばした『歎異抄』である。それにしても書物と時空を超えて交流できるのはなんと素晴らしいことだろう。

＊＊＊



小林秀雄『考えるヒント』文春文庫／75年理学系研究科博士課程中退。77年理学博士。九州大学助教授、米プリンストン大学客員研究員などを経て、94年より理学系研究科教授。09年から同研究科長。専門は気候力学・大気海洋力学。